

第7回 富良野市制施行50年史編さん委員会

と き： 平成28年5月27日

と ころ： 富良野文化会館第1会議室

中元委員長挨拶

審 議

1. 編さんの進捗状況（平成27年11月27日 第6回編さん委員会以降）

① 第1編 富良野市五十年の歩み

第2編 富良野市の概要

第3編 地域の歩み

第4編 富良野市歴史年表

各編の編集、執筆

② 広報ふらの「その時、あなたは」12月号から4月号で5回連載

2. 「第1編 富良野市五十年の歩み」について（資料 No.1）

3. 「第2編 富良野市の概要」について（資料 No.2）

4. 「第3編 地域の歩み」について（資料 No.3）

5. 「第4編 富良野市歴史年表」について（資料 No.4）

6. 「第5編 富良野市郷土資料文献目録」について (資料 No.5)

7. 今後のスケジュール

- ① 平成28年6月～平成28年10月 執筆・編集
- ② 平成28年6月～平成28年10月 各部課に校正依頼
- ③ 平成28年10月下旬 第8回編さん委員会
- ④ 平成28年11月上旬 製本印刷 入札・契約
- ⑤ 平成28年12月上旬 祝辞の依頼
- ⑥ 平成28年11月～平成29年3月 構成、校正(3回または4回)
- ⑦ 平成29年3月末日 印刷・製本、納品・検収
- ⑧ 平成29年2月～3月 資料の整理・保管

8. その他

次回の開催予定 10月下旬の予定

富良野市史編さん室 杉浦 (勤務日 火曜日～金曜日 9:00～17:15)

電話 0167-42-2407 (市生涯学習センター)

富良野市制施行五十年史

ゴミの分別とリサイクル
中心市街地の活性化
広域合併から広域連合
市民生活の移り変わり

目次

第2編 富良野市の概要

発刊の辞 富良野市長 能登芳明

発刊を祝して 北海道知事 高橋はるみ

発刊を祝して 友好都市 兵庫県西脇市長 片山象三

発刊を祝して 富良野市議会 議長 北 猛俊

口絵 (富良野市市民憲章、富良野市歌、市の花・木・鳥・獣、
富良野の四季、市制五十周年記念式典・富良野市名誉
市民)

例言

第1編 富良野市五十年の歩み

富良野市の誕生

新都市の建設

稲作減反と農業基盤整備

戦後開拓の終焉

人情国体の成功

ふらのワインづくり

富良野スキー場とワールドカップ

姉妹都市・友好都市

根室本線のローカル化

「北の国から」・ラベンダー観光

第3編 地域の歩み

富良野市街西部(日の出町、本町、朝日町、幸町、若松町、
栄町、弥生町、末広町、若葉町、新富町、
桂木町、西町、北の峰町、扇町、緑町、南
町、北斗町)

富良野市街東部(住吉町、錦町、瑞穂町、花園町、新光町、
春日町、麻町、東町、東雲町)

島の下

清水山

学田一区

学田二区

学田三区

布部

五区

扇山

御料

大沼

鳥沼

布礼別

富丘

ベベルイ

八幡丘

麓郷

山部

東山

老節布

西達布

平沢

第4編 富良野市歴史年表

第5編 富良野市郷土資料目録

編集後記

資料No.1

第1編

富良野市五十年の歩み

富良野市誕生

悲願の市制 昭和28年「町村合併促進法」が施行されると、全国的に合併ブームが巻き起こった。合併によって人口が3万人を超える市制に昇格できたからであった。道庁も合併に積極的に乗り出し、富良野町・山部村・東山村の合併が理想として合併を勧告した。山部村は農業、石綿鉱山、木材などの基幹産業が全盛で財政力が強く、合併の同意は得られなかった。東山村は財政力が脆弱で合併に伴う交通の便、文化や経済のつながりで地域の発展が見込めることから合併に合意、同31年9月30日、富良野町と対等合併したが、市制施行の夢は消え去った。

昭和40年3月、「市町村の合併の特例に関する法律」で、人口3万人以上でも市の昇格が可能となった。この特例は昭和41年3月31日までに申請のあったものに限るとされた。富良野町としては、是が非でもこの期限までに山部村との合併を実現しなければ永久に市になることができなかった。富良野町は山部町に合併の申し入れ、再度合併問題が両町で論議された。

山部町は同40年1月1日に町制を施行したばかりでもあり、住民の反対が根強く、議会も住民も賛否両論に真っ二つに分かれた。住民は賛成派と反対派に分かれて対立する事態となり、同年10月31日には、合併の是非を問う住民投票が行われた。その結果は賛成派が勝ったもののわずかに159票の小差であった。両町では合併促進法に基づき各14名の合併協議会を組織して多くの論議を重ねた。翌41年2月14日、山部町議会で賛成多数、富良野町議会は満場一致で合併を決定した。

昭和41年5月1日、メーデーの日の青空に富良野市の誕生を

祝福するアドバルーンがあがった。過去10年にわたる悲願であった富良野町と山部村の合併が実現し、人口36,627人(昭和40年国勢調査)の待望の新市が誕生したのである。

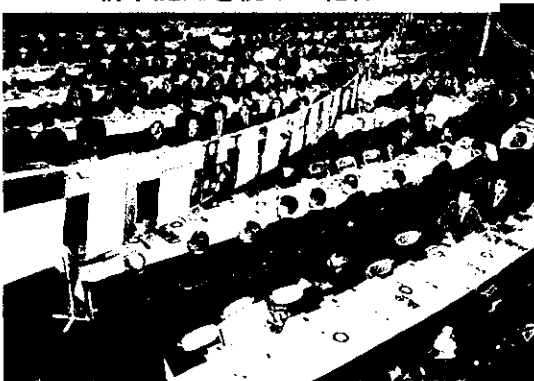
新市長には富良野町長の高松竹次、助役には山部町長の日野政史、市議会議長は鎌田繁雄、副議長に赤廣義武が就任した。

市制祝賀記念式 収穫の秋を終えて一段落した昭和41年11月3日、菊薫る文化の日、市制祝賀記念式が西中学校体育館で盛大に挙行された。カラフルな万国旗で彩られた会場には、町村金吾道知事をはじめ市内外の来賓約800名が出席し、道内29番目の市の誕生とその門出を祝った。

高松市長の式辞の後、渡辺一策市章選定委員長から市章が披露され、引き続き市歌(作詞 小田観螢、作曲 八州秀章)が発表された。富良野東中学校3年生の明るい元気なコーラスが会場に響き渡った。また、富良野、山部、東山の各市街では、



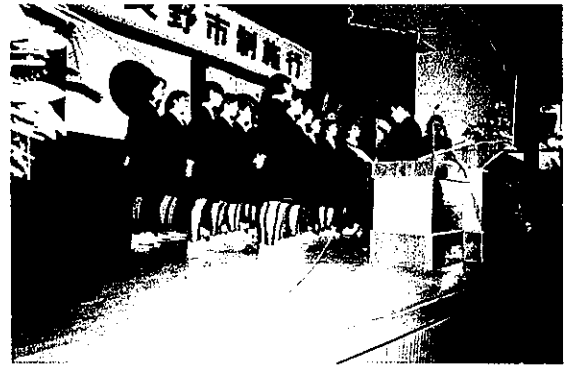
新市誕生を祝して乾杯



祝賀記念式会場



自衛隊の市歌のバンド演奏



市内中学生の市歌の合唱

祝賀音楽パレードも行われ、祝賀ムードを盛り上げた。

また、青年都市の発足に当たって意義あるイベントとして、11月6日には青年模擬市議会が開かれた。市内の各種青年団体から選ばれた青年たちが、市長(日下博行)、助役(小林 誠)、議長(増沢 寛)、副議長(高田邦雄)、各常任委員長、議員に扮して理想とする新都市の建設について青年らしい夢と希望に満ちた意見が次々と述べられた。

また、市のシンボルとなる富良野市章は、広く道内に募集し、総数152点の応募があり、10月15日に審査・制定委員会を開き、富良野高校の田村正美教諭の作品に決定、制定された。

それは富良野の頭文字「フ」、外周の輪(三分して富良野・山部・東山の地域を表したものの)、この二つを組み合わせたものであった。鋭角に表現された「フ」の字は富良野を取り巻く山岳美を象徴したもので、市勢の発展を表している。円の輪は悠久の平和と



市制施行した当時の富良野市街(昭和41年)

市民の調和を象徴するデザインである。白地に市章を入れた市旗は、本庁、山部支所、東山支所の掲揚ポールに高々と掲げられた。

資料No. 2

第2編 富良野市の概要

第1章 地勢・人口

位置・面積 富良野市は、北海道のほぼ中央に位置し、東西約32・8 km、南北約27・3 km、周囲約133・0 km、面積600・71 km²の市域を有する。北は芦別市・中富良野町・上富良野町、西は芦別市、東と南は南富良野町と接する。上川総合振興局管内南部の富良野盆地の南半を占め、約7割を山林が占める自然環境にある。面積は道内市で13番目、上川総合振興局管内では9番目の広さである。

東には「北海道の屋根」と呼ばれる大雪山連峰から南に連なる富良野岳(1912 m)、前富良野岳(1625 m)、トウヤウスベ山(1400 m)、大麓山(1459・5 m)などの山々が聳える。富良野岳の山麓には、高層湿原の原始ヶ原がある。

西には夕張山地の北の峰(1075 m)、富良野西岳(1331 m)、芦別岳(1726・5 m)などが急峻な山岳が連なる。富良野芦別道立自然公園に指定されており、北の峰の東斜面には富良野スキー場、芦別岳登山口には太陽の里・山部自然公園がある。

標高のある東西の両山脈には挟まれて、南北に伸びたほぼ長円形の富良野盆地が形成され、その中央を右狩川の最長の支流である空知川が、西達布川、山部川、ユーフレ川、布部川、布礼別川などの支流を集めて、富良野市街北部で富良野川と合流し、島の下の溪谷を通り、芦別方面に流下している。

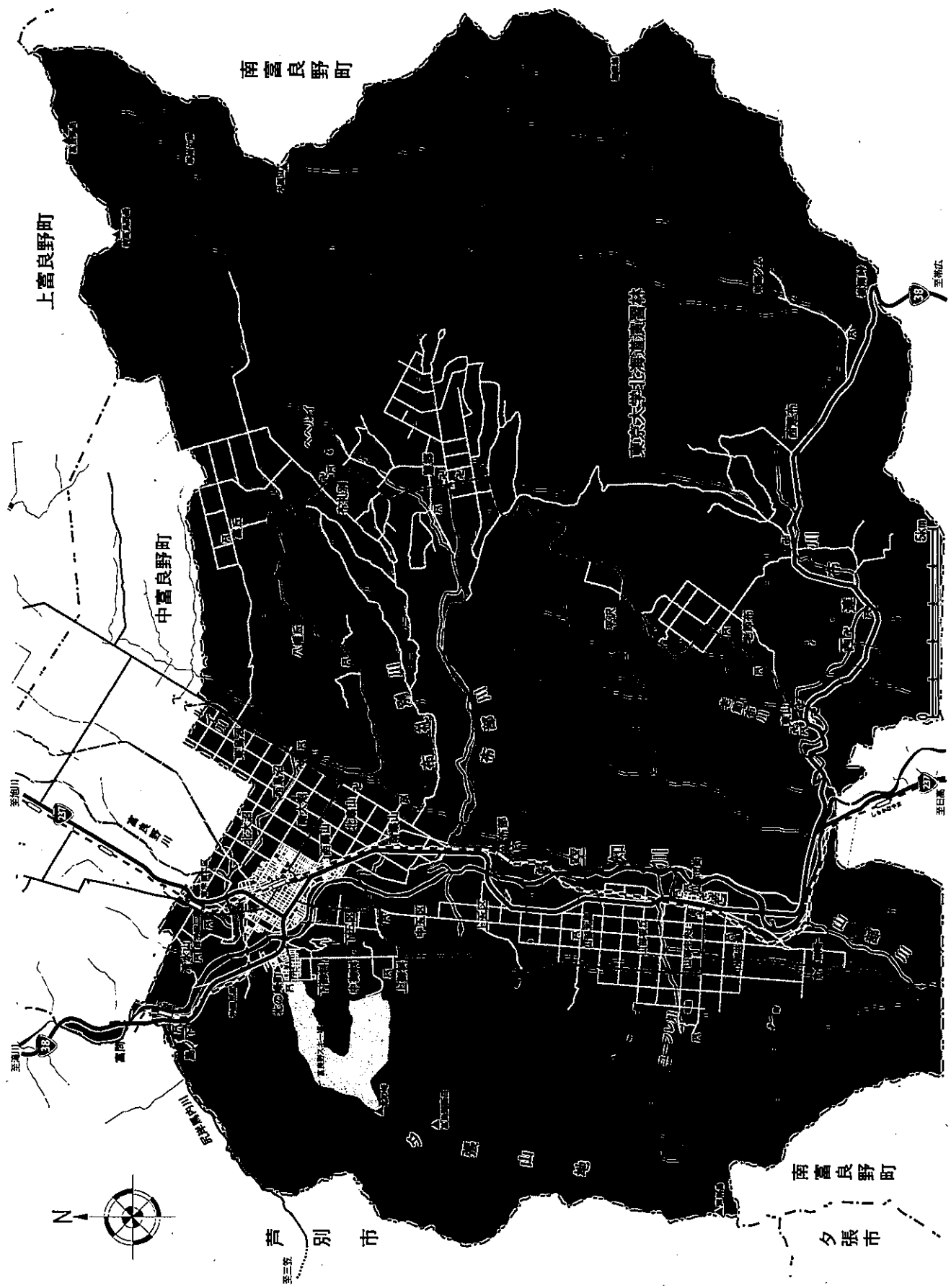
空知川とその支流によって形成された沖積地や扇状地は、概ね肥沃で水田耕作に適し、東部の丘陵地帯は主に畑地が拡がり、道内でも有数の農業生産額を誇る農村都市である。

富良野市街地は北端にあり、JR根室本線・富良野線、国道38号、国道237号が通り、国道で旭川まで57 km、札幌まで166 km、帯広まで120 kmである。

なお、経緯度や面積は、国土地理院が平成14年4月1日から世界測地系に合せて測定法を改正し、より正確な位置、面積等が表示できるようになった。毎年10月1日現在の全国都道府県市区町村別面積が国土地理院で公表されるが、富良野市の面積もわずかであるが増減している。

土地利用・地価 地目別の土地利用の推移をみると、まず田は昭和50年度には約41 km²となり、同45年度と比較すると約12 km²に拡大した。これは全道的な造田ブームによるもので、畑や原野などが水田化された。同55年度以降は、減反政策による転作で作付面積は大きく縮小したが、地目としては微減の傾向にある。畑は同41年度は約90 km²で、その後は水田化が進んだにより、同50年度には約70 km²まで減少し、現在まで大きな増減はなく推移している。

宅地は、昭和45年度約4 km²にすぎなかったが、同50年度には富良野市街周辺の宅地化が進み、倍増を超え約11 km²となった。人口が減少しつつも、核家族化により住宅戸数が増えたことが要因である。同55年度には、農村部の市街地の過疎化により、約7 km²まで縮小したが、同60年度から現在まで微増している。その他の地目では、山林は同50年度は、同45年度より約67 km²増加した。これは戦後開拓地や山間地での離農が進み、農地が山林に転換されたことに起因している。牧場は、同50年度0・1 km²であったが、同60年度には半減している。酪農振興に取り組んだ八幡丘地区や西達布たちばな地区の不振を反映していると思われる。



南富良野町

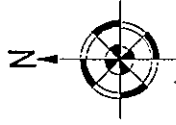
上富良野町

中富良野町

南富良野町

芦別市

夕張市



富良野市の経緯度・面積

経緯度

区 分	東(東経)	西(東経)	南(北緯)	北(北緯)
経緯度※1	142° 40' 39"	142° 16' 18"	43° 09' 24"	43° 24' 05"

面積

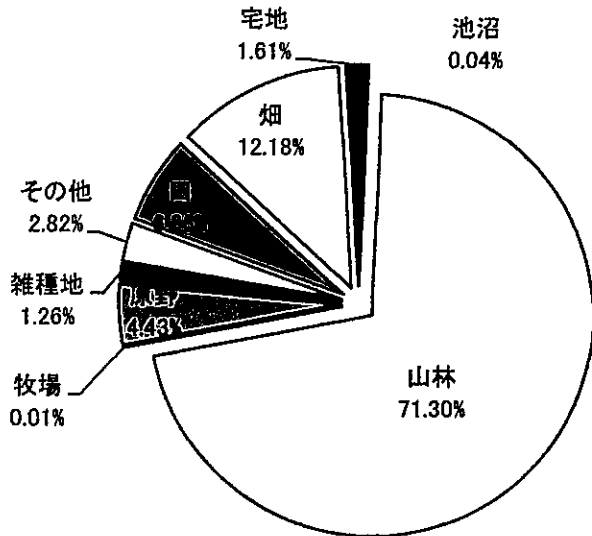
総面積※2	東西	南北	周囲
600.71 km ²	約 32.8 km	約 27.3 km	約 133.0 km

資料 国土交通省国土地理院

※1 経緯度は、国土交通省国土地理院「都道府県市区町村の東西南北端点の経度緯度」による

※2 総面積は、同「平成 25 年全国都道府県市区町村別面積調」による

平成25年地目別土地面積割合



富良野市内の地価は、国土交通省が毎年1月1日現在の地価公示価格3地点(末広町・南麻町・日の出町)を、北海道が判定した毎年7月1日現在の地価調査価格3地点(桂木町・扇町・幸町)を国土交通省がホームページや新聞に公表している。バブル経済の土地神話は、富良野市にも及び、中でも富良野市街の中心部の地価は高騰した。バブル景気崩壊後は中心部の地価は急落し、市街周辺の住宅地の地価も下がり続けている。しかし、観光拠点となったフラノマルシェが所在する幸町の地価は下げ止まり、わずかではあるが上昇している。

地目別土地面積※1

(単位:km)

区分 年度	田	畑	宅地	鉱泉地	池沼	山林	牧場	原野	雑種地	その他	総面積※2
昭和 41 年	29.06	90.29	3.52	—	—	370.86	—	112.91		606.64	
昭和 45 年	28.98	89.16	4.02	—	—	371.11	—	113.37		606.64	
昭和 50 年	41.39	73.44	11.48	—	0.25	438.20	0.10	36.77		601.63	
昭和 55 年	41.43	70.68	7.01	—	—	427.98	—	29.25	25.28	601.63	
昭和 60 年	41.14	74.71	7.89	—	0.25	426.09	0.05	29.76	5.27	16.47	601.63
平成 2 年	40.79	74.86	8.41	—	0.23	425.92	0.05	28.35	5.14	17.08	600.83
平成 7 年	39.94	75.82	8.72	—	0.24	426.87	0.05	27.22	5.36	16.61	600.83
平成 12 年	39.65	75.51	9.14	—	0.25	427.81	0.05	26.17	5.59	16.66	600.83
平成 17 年	39.21	75.08	9.39	—	0.24	427.52	0.04	25.24	7.32	16.93	600.97
平成 22 年	38.30	73.12	9.64	—	0.23	428.42	0.04	27.27	7.00	16.95	600.97
平成 26 年	38.18	73.10	9.72	—	0.22	428.52	0.04	26.69	7.55	16.96	600.71

資料 総務部税務課

※1 地目別土地面積は、各年1月1日現在の「固定資産の価格等概略調書」による

※2 総面積は、各年 10 月 1 日現在の国土交通省国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」による

国土交通省地価公示価格

単価:円/m²

区分 年度	末広町 16-7	南麻町 6-10	日の出町 7-3
昭和 50 年	—	—	58,500
昭和 55 年	—	—	68,000
昭和 60 年	—	23,100	—
平成 2 年	31,800	23,200	125,000
平成 7 年	31,800	20,500	121,000
平成 12 年	30,200	20,000	93,500
平成 17 年	28,500	18,500	68,000
平成 22 年	24,700	17,000	41,000
平成 27 年	24,400	17,000	33,000

国土交通省資料

都道府県地価調査価格

単価:円/㎡

区分 年度	桂木町 4-84	扇町 10-15	北の峰町 11-21	幸町 7-28*
平成 9 年	23,800	20,300	21,000	68,000
平成 12 年	23,800	19,800	20,800	62,000
平成 17 年	22,600	18,700	19,100	47,500
平成 22 年	20,200	16,700	17,700	40,000
平成 27 年	19,500	15,500	17,300	41,000

国土交通省資料

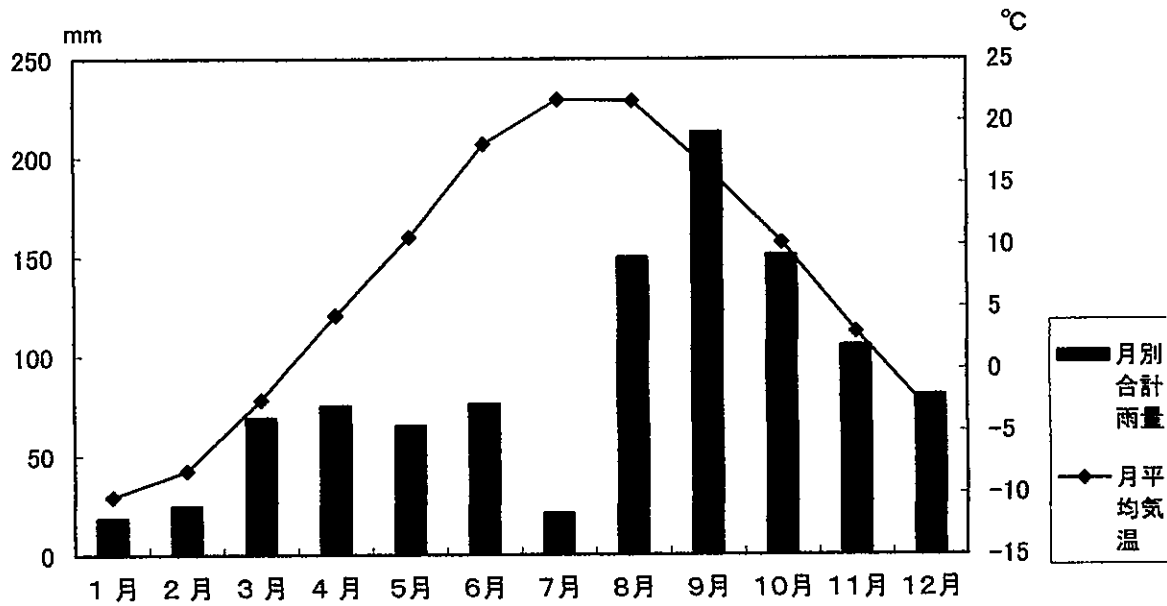
気象 年間を通して四季の移り変わりが明瞭な大陸性の気候である。概して気象の変化は少なく、市になってからも大きな自然災害は発生していない。

昭和41年から現在までの気温は、年平均気温摂氏5〜7度、最高気温摂氏31〜37度、最低気温マイナス摂氏24〜33度で、数値だけでは変動や傾向を見極めることはできない。なお、過去最高気温は平成26年6月4日の摂氏36・3度、過去最低気温は昭和52年1月29日のマイナス摂氏34・5度である。

降水量は800〜1400ミリで推移し、気温と同様に変動を読み取るとは難しいが、市民の生活実感からすると、気温がマイナス摂氏30度以下に下がることは極まれになり、降雪量も以前に比較すると減少したように感じられる。また、真夏には摂氏35度を超えることも多くなり、地球規模の温暖化を実感している。

近年、北海道においても、降雨・降雪が局地化・集中化・激甚化し、水害、土砂災害、農業被害が頻発している。今後の気候変動等による災害リスクの増大に対応するため、さらなる治山治水対策、農地・農業用施設の防災対策を推進しなければならないであろう。

平成25年月別合計雨量・月平均気温



気象の推移

区分 年度	気 温(°C)			降 水 量(mm)		積 雪(cm)
	年平均	日最高	日最低	年合計	日最大降水量	寒候期最大値*
昭和 41 年	6.0	31.4	-26.6	1,161.5	85.9	130
昭和 45 年	6.0	33.0	-31.6	1,023.5	60.5	168
昭和 50 年	6.5	33.0	-28.6	1,168.0	138.0	69
昭和 55 年	5.5	33.0	-27.2	893.0	—	77
昭和 60 年	5.7	35.8	-33.6	915.0	108.0	79
平成 2 年	7.7	34.2	-32.8	881.0	38.0	52
平成 7 年	6.6	33.0	-26.6	1,027.0	49.0	52
平成 12 年	6.2	36.3	-31.7	1,402.0	79.0	103
平成 17 年	6.2	33.3	-27.5	958.0	94.0	94
平成 22 年	7.5	33.2	-24.1	1,227.5	61.0	79
平成 26 年	6.7	36.3	-27.3	834.5	45.5	81

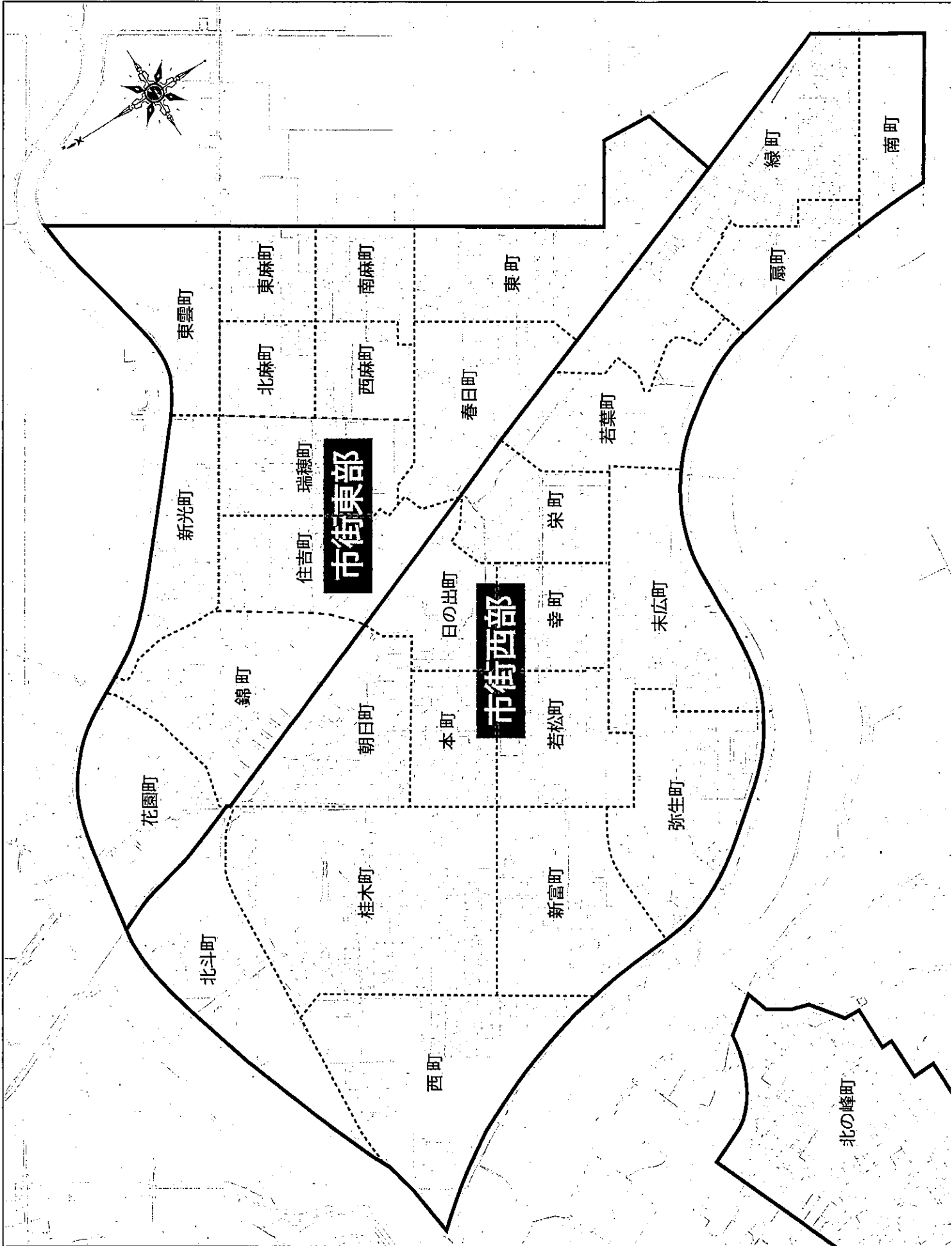
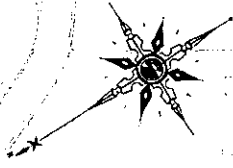
資料 気象庁「気象統計情報」

※寒候期とは、前年秋から当年春に至る期間をいう

資料No. 3

第3編

地域の歩み



富良野市街西部

富良野市街は、明治29年9月、札幌農学校が道庁より約1、011万坪を同校の学田地として、仮渡しを受けた第八農場の一部であった。同33年6月、下富良野市街地を新設するため返地された。同年8月1日、北海道官設鉄道十勝線（現在の富良野線）の上富良野―下富良野間が延伸・開業し、駅を中心に下富良野市街が形成された。

当初、鉄道は富良野盆地の東側を南北に縦貫して敷設する予定であった。扇山地区の東8線（現在の扇山公民会館付近）には駅の開業を見込んで、旅館・料理店・荒物店など十数戸が建ち並んでいた。しかし、用地確保や鳥沼周辺の湿地帯の難工事が予想されたために、盆地西側を通る路線に計画変更された。

道庁は下富良野駅を中心とした市街地区画を設定し、扇山の商業者を優先して用地貸下げしたことから、駅が本通りの突き当りに設置されると、扇山から駅前



明治末期の下富良野駅前

の本通りに相次いで移った。扇山はしばらくの間、「旧市街」と呼ばれた。

同36年9月1日、富良野村から上富良野村と下富良野村に分かれ、駅前の本通りに下富良野村戸長役場の仮庁舎が設置された。駅の開業とともに、本通り沿いの現在の朝日町・本町には、商店が軒を連ねた。間もなく、戸長役場は西2条南3条目（現在の富良野郵便局）に移ると、その周辺に警察署、検察局、裁判所、帝室林野管理局などの官公署が集中した。

入植が始まって3年あまりで鉄道が敷設されたことにより、富良野原野の木材は、石狩、上川方面の先進開発地域に輸送できるとなり、駅の土場は開拓地から搬出される丸太で溢れた。こうした造材ブームはしばらく続き、農業に先だって基幹産業となった。

大正2年11月10日、滝川―下富良野間の釧路本線（現在の根室本線）が開通し、下富良野駅は道央・道北・道東部を結ぶ交通の要衝になった。釧路本線の開通と同時に、旭川―下富良野間は「富良野線」と改称されるが、両線路の接続の関係から、下富良野駅は現駅舎の位置に移転した。

これにより、新駅舎前が街の中心部となり、本通りを結ぶ零号通り（現在の相生通り）が繁華街となった。駅前通りとなった東五条通り沿いの日の出町や幸町にも町並みが形成され、市街を大きく発展させた。

なお、大正2年の釧路本線の開通時には、当時の駅敷地が低地であったために、軌道を西学田二区の清水山の崖下まで引き込み、数万台の土砂で埋立て工事が施工された。

下富良野駅は道央部・道北部・道東部を結ぶ分岐点の役割を担うことになった。特に一大商業圏である道央部と陸路で結ば

れたことは、様々な経済効果をもたらすと同時に、富良野の開拓を加速させた。

市街地には、商店・旅館・料亭・工場・病院・銀行・倉庫・寺社・役場・警察署・学校などが建ち並び、富良野盆地の行政・経済・交通の中心となった。開拓の進展するにつれて、地元の農産物を加工する澱粉・製粉などの食品加工業、味噌・醤油・酒などの醸造業が興隆し豊富な森林資源を背景に木工所・製材所・マッチ工場などの木材加工業も隆盛を極めた。

その一方同2年、大凶作に見舞われ、特に水田地帯では大打撃を受けた。富良野はまだ畑作が中心であったが、水稻の試作が成功して本格的な造田が始まりつつあった頃であり、土地を手離して移住せざるを得ない農民もあつた。

同3年、ヨーロッパで第一次世界大戦が起こると、ヨーロッパの先進諸国は日本に軍需品・日用品・食糧を求めようになった。さらに、日本はヨーロッパからの輸入が途絶えたアジア市場を独占し、日本は未曾有の好景気となった。北海道もこの好景気の影響を受け、同6年にはロン



清水山より下富良野市街を望む (明治 39 年)

ドン農産物市場で、青豌豆を筆頭にハツカ・澱粉・小豆が異常に高騰し、富良野でも空前の雑穀ブームに沸き「豆成金」や「澱粉成金」が続出した。

八幡丘・布礼別・ベベルイなど平素はかえりみられなかったやせた土地まで先を争って開墾された。同6年から同9年にかけて好景気を迎え、繁華街は不夜城を呈した。さらに木材や軍需品の原料となる亜麻も高値を呼び、同6年には、帝国製麻株式会社富良野製線工場が操業した。同5年には、富良野電気株式会社創業し、市街に電灯が点灯した。

鳥沼、大沼から中富良野にかけては、泥炭の低湿地帯であったが、兜谷徳平の尽力により、同6年には富良野土工組合が設立された。同8年、同組合により中央大排水路が完工し、泥炭地の排水が進んだ。さらに畑地から水田化をめざし、同10年には富良野用水土工組合が組織された。同12年、山手幹線用水路が竣工し、徐々に稲作に転換された。

このような農業関連の整備事業や空前の好景気により、人口も急増し、同8年4月1日、下富良野村は町制を施行し、富良野町となった。

しかし、第一次世界大戦が終結し、欧州諸国が復興し始めると、農産物の価格は急転直下、暴落し、再び不況に逆戻りした。これ以降、投機的な作物は敬遠されるようになり、水田経営を中心に除虫菊・亜麻・甜菜などの生産が急増した。

このような不況下に追い討ちをかけるように、大正15年には、富良野沿線唯一の金融機関であった絲屋銀行が整理休業に追い込まれ、富良野の金融・経済界は大混乱に陥った。

大正15年には再び大凶作に見舞われた。昭和に入ると、冷害、水害による凶作、豊作飢饉などに見舞われた。開拓の歴史

が浅いため、資本の蓄積がなかった農家に決定的な打撃をあたえ、農民の生活は苦境のどん底に陥った。これを機に町は農村経済更生運動、農家負債整理対策、自作農創設に取り組んだ。市街の商工業は、経済恐慌による不況と満州事変、日中戦争へと続く戦時体制の統制経済で衰退の一途を辿った。同20年7月15日、何ら軍事施設をもたない無防備な富良野市街も空襲された。

戦後、市街を蛇行し貫流する無頭川の流域は湿地であったが、昭和25年以降宅地化された。また、終戦後、引揚者が富良野にも入ってくる、今のすずらん通りに露店が並ぶようになった。通称「ヤミ市」と呼ばれ、金さえ出せば大半の生活物資を買うことができ

た。その後、引揚者の生活を安定させるためにマーカーが設置され、町民の台所として繁盛した。

市街地は、本通りを境に東西に東2条から東7条と西2条から西5条、相生通りを境に南北に南1丁目から南6丁目と北1丁目から北2丁目



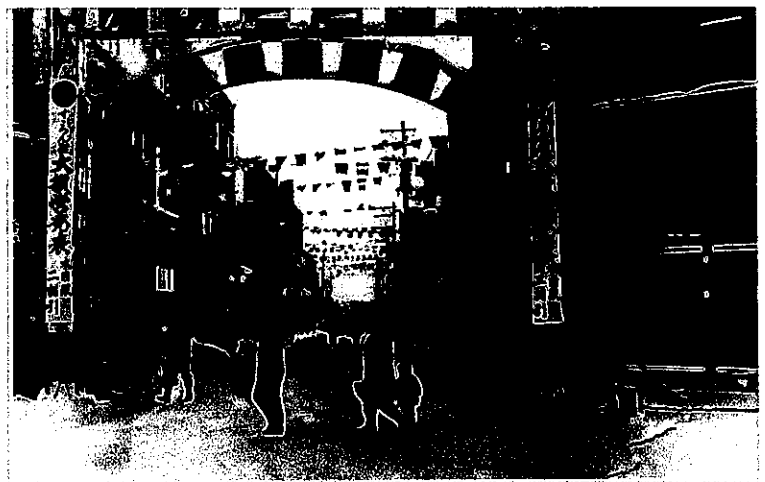
清水山より下富良野市街を望む（昭和10年）

区画され、何条何丁目と呼称されていた。昭和30年代に入ると、市街に隣接した末広町、栄町、若葉町、学田一区が徐々に宅地が拡がり、郊外の学田三区に北の峯団地、西扇山の鉄道沿いには公住団地が形成された。

市街地周辺の宅地化が進んだことから、将来

の街区の発展を見据えて、昭和37年1月1日、新しい町名が設定された。従来の市街地は、朝日町・本町・日の出町・若松町・幸町となり、西扇山に栄町・若葉町・緑町、学田一区の一部に末広町・弥生町・桂木町となった。

同44年12月1日、西扇山に扇町が置かれ、同50年6月1日、学田一区に新富町・弥生町・西町が設定され、同63年11月1日、扇町の南側に南町が置かれた。



すずらん通り商店の大売り出し「大損営発表」

（昭和37年12月8日）

資料No. 4

第4編

富良野市歴史年表

和歴	西暦	月日	富良野の出来事	月日	日本・世界の出来事
嘉永7 安政元	1854			3・3 28・3	日米和親条約(神奈川条約)締結 クリミア戦争
安政4	1857	4・27	箱館奉行石狩在勤足輕松田市太郎、石狩川水源調査、焼山なる処より硫黄を採取 箱館奉行蝦夷御用雇松浦武四郎、空知川を遡り尻岸馬内川近くに達する 十勝岳大噴火(安政噴火)	5・10	インド、セポイの乱
安政5	1958	3・10	松浦武四郎、十勝越えのため上富良野から富良野岳と前富良野岳の鞍部を通り、原始ヶ原を経てシリソラプチ川上流に達する(12日)	9・6 5・19 28	露・清、アイグン条約締結 日米修好通商条約締結 安政の大獄
慶応3	1867			12・10 1・9	睦仁親王(明治天皇)踐祚 第15代将軍徳川慶喜、大政奉還を上奏 王政復古の大号令
慶応4 明治元	1868			7・4 3・1 17・11 14・3	鳥羽・伏見の戦い(戊辰戦争始まる) 五箇条の御誓文 江戸城無血開城 天皇、江戸で政務を執ることを宣言、江戸を東京と改称 一世一元の詔、明治と改元 旧幕府軍、箱館の五稜郭を占領 旧幕府軍、蝦夷共和国樹立
明治2	1869			12・10 9・8 15・26	薩長土肥四藩主、「版籍奉還」の上表を提出 五稜郭の旧幕府軍、政府軍に降伏(戊辰戦争終わる) 版籍奉還(25日) 開拓使設置 蝦夷地を北海道と改称 開拓使函館出張所設置
明治3	1870			9・9 19	平民の苗字使用を許可

明治 10	明治 9	明治 8	明治 7	明治 6	明治 5	明治 4	
1877	1876	1875	1874	1873	1872	1871	
8・1	8・7		7・3	9・1	2・26		
札幌農学校の佐藤昌介等学生6名、ペンハロー教師の引率により空知川とその支流芦別川で鉱物を調査(6日)	黒田清隆開拓使長官、空知川煤田を实地調査		開拓使雇地質学者ライマン、空知川煤田の石炭層を調査(6日)	開拓使物産係榎本武揚、地質・鉱物調査のため、空知川沿岸を調査、有望な炭田を発見	一ノ瀬長春、沙流川から鶴川に入り、空知川上流から十勝に越す(3/4)		
42 1219	842 14126	9975 207297	108211 302171	97 1328	12 11 9 9 8 5 2 28 9 14122211	11 9 9 7 5 1 121413141024	
西南戦争始まる 東京開成学校・東京医学校合併、東京大学設立	日朝修好条規(江華条約)締結 日曜全休・土曜半休制実施 札幌学校、札幌農学校と改称、開校式	江華島事件 樺太・千島交換条約締結 開拓使仮学校、札幌学校と改称 札幌学校開校	黒田清隆、開拓使長官就任 屯田兵規則制定 板垣退助等「民選議院設立建白書」提出 佐賀の乱	地租改正 岩倉使節団帰国 開拓使札幌本庁、新庁舎に移転 板垣退助等「民選議院設立建白書」提出	徴兵令発布 6年1月1日と改正) 太陰暦を太陽暦に変更(明治5年12月3日を明治6年1月1日と改正) 浦河・樺太の5支庁を設置(上川は本庁直轄) 新橋―横浜間鉄道開業式 開拓使庁を札幌本庁と改め、函館・根室・宗谷・	戸籍法施行 東京・芝の増上寺に開拓使仮学校設置 学制発布 新橋―横浜間鉄道開業式 開拓使庁を札幌本庁と改め、函館・根室・宗谷・浦河・樺太の5支庁を設置(上川は本庁直轄) 太陰暦を太陽暦に変更(明治5年12月3日を明治6年1月1日と改正) 徴兵令発布	郵便制度発足 新貨幣を円・銭・厘とする 廃藩置県 日清修好条規調印 開拓使庁を札幌に設置 岩倉使節団、欧米に派遣

明治20	明治19	明治18	明治17	明治16	明治15	明治14	明治13	明治12	明治11
1887	1886	1885	1884	1883	1882	1881	1880	1879	1878
5・1									
道庁技手柳本通義等9名、富良野盆地の殖民地選定調査を実施、上フラヌ・中フラヌ・下フラヌ・									・動植物調査
121・2622	10651・24291616	12・22	1210・431	111・2829	11721・13584	10109・121115	113・2817	741・23417	75・2214
東京電燈会社、配電開始 保安条例発布	3県1局廃止、北海道庁設置 上川仮新道開削 北海道土地払下規則制定 ノルマントン号事件	内閣成立 太政官制度廃止、内閣制度実施、第1次伊藤博文	秩父事件 朝鮮、甲申事変	北海道事業管理局、農商務省に新設 鹿鳴館、東京麹町に完成	軍人勅諭発布 開拓使を廃止、函館県・札幌県・根室県設置 空知集治監設置 官営幌内鉄道全通	樺戸集治監設置 明治十四年の政変 国会開設の詔	愛国社、国会期成同盟と改称 官営幌内鉄道、手宮―札幌間開通	開拓使札幌本庁舎焼失 琉球藩廃止、沖縄県設置 北海道、郡区町村編制法施行、石狩郡役所設置(翌年3月開庁)	大久保利通内務卿暗殺 大小区制を廃止、郡区町村編制法発布

明治30	明治29	明治28	明治27	明治26	明治25	明治24	明治23	明治22	明治21	
1897	1896	1895	1894	1893	1892	1891	1890	1889	1888	
4・1	12・25 11・30 6・1 5・29						1・15		9・1	
フラヌ原野の貸下げ出願受付開始	富良野原野、殖民地区画設定 中村千幹、空知川を遡り現地調査のため扇山に達する 札幌農学校、フラヌ原野の一部（後の第八農場）を同校維持資金に編入 フラヌ原野の貸下げを告示						滝川村戸長役場設置（富良野地方を含む）			ケナチヤウシ（山部以南）の4殖民地を選定（5月下旬） 11月中旬 十勝岳噴火（明治噴火）
4・1	654 15146	44 2317	83 129	11 51	118 11	952 1113	1097 30201	62 2511	124 1430	
北海道国有未開地処分法施行	第1回アテネ・オリンピック大会開幕（15日） 北海道鉄道敷設法公布 明治三陸地震	日清講和条約（下関条約）締結 三国干渉	甲午農民戦争（東学党の乱） 日清戦争	度量衡法施行 夕張炭坑夫暴動	北海道炭砒鉄道、室蘭―岩見沢間開通 北海道炭砒鉄道、追分―夕張間開通	北炭・空知炭砒、採炭開始 大津事件 奥州線（現在の東北本線）、上野―青森間全通	第1回衆議院選挙 上川郡に旭川村・永山村・神居村設置 教育勅語発布	大日本帝国憲法発布 北見道路開削（8/30 完工）	黒田清隆内閣成立、枢密院設置 道庁新庁舎竣工	

資料No. 5

第5編

富良野市郷土資料文献目録

富良野市郷土資料文献目録 目次

市町村史・通史	1	消防	21
言語	1	学校教育	21
事典	2	富良野地区／山部地区／東山地区／高等学校・専門学校	21
行政	2	文化財	23
総合計画／市勢要覧／広域圏／議会／その他	2	文化団体	25
地域史	6	青少年団体	26
富良野地区／山部地区／東山地区	6	女性団体	26
自然	9	高齢者団体	27
観光	10	スポーツ団体	28
商工・金融	10	宗教	29
労働・農民・消費者運動	11	伝記・自叙伝	30
農業	12	文学	31
農業計画／農業協同組合・農業委員会／土地改良	12	小説・随筆・エッセー・シナリオ／短歌／俳句／詩	31
農業関連団体	13	絵画・写真	35
玉葱／西瓜・メロン／その他の農作物／農産加工	13		
畜産・酪農／地域農業団体	13		
林業	15		
環境・衛生	16		
交通・防犯・通信・司法	17		
建設・水道・都市計画	17		
社会福祉	18		
社会福祉計画／社会福祉施設／社会福祉団体	18		
保健・医療	19		
軍事	20		

市町村史・通史

- ・下富良野村学事会 1913 『下富良野村郷土誌』 同学会
- ・金崎白明編 1913 『富良野繁栄誌』 富良野社
- ・西川仁之進編 1952 『開町五十年略史』 富良野町
- ・岸本翠月編 1968 『富良野市史 第一巻』 富良野市役所
- ・岸本翠月編 1969 『富良野市史 第二巻』 富良野市役所
- ・富良野市史編纂委員会 1994 『富良野市史 第三巻』 富良野市役所
- ・千田豊治編 1939 『山部村誌』 山部村誌刊行所
- ・日野政史 1966 『山部町史』 山部町役場
- ・岸本翠月 1969 『富良野地方史』 富良野地方総合開発連絡協議会
- ・菅原今朝男 1955 『観光地道立指定記念 富良野地方写真集』 北洋出版社
- ・阿部政次郎・結城駒雄 1966 『富良野市制記念写真集』 日刊富良野新聞社
- ・阿部政次郎編 1973 『富良野市開基70周年記念写真集』 日刊富良野新聞社
- ・阿部政次郎編 1976 『富良野の顔』 日刊富良野新聞社
- ・富良野市生涯学習センター編 2004 『富良野市開庁100周年記念誌 民衆が語る富良野100年のあゆみ』 富良野市
- ・富良野市郷土研究会編 1979 『富良野こぼれ話』 同研究会
- ・富良野市郷土研究会編 1984 『続 富良野こぼれ話』 同研究会
- ・富良野市開基90周年記念誌編集委員会 1994 『富良野市歴史写真集』 富良野市郷土研究会
- ・富良野市郷土研究会 2014 『ふらの博物誌』 同研究会
- ・編集事務局 1970 『上川戦後開拓誌』 北海道上川支庁

- ・中富良野村史編纂委員会 1954 『中富良野村史』 中富良野村役場
- ・中富良野町史編纂委員会 1986 『中富良野町史上・下巻』 中富良野町
- ・岸本翠月編 1967 『上富良野町史』 上富良野町役場
- ・上富良野百年史編纂委員会 1998 『上富良野百年史』 上富良野町
- ・岸本翠月編 1960 『南富良野村史』 南富良野村役場
- ・南富良野町史編纂委員会 1991 『南富良野町史上・下巻』 南富良野町役場
- ・南富良野町史編纂委員会 1991 『目で見る南富良野の歴史』 南富良野町役場
- ・南富良野町史編さん委員会 2012 『南富良野町史 第二巻』 南富良野町

- ・岸本翠月編 1963 『占冠村史』 勇払郡占冠村役場
- ・山地隆治 2006 『占冠村百年史』 占冠村
- ・岸本翠月編 1964 『しむかづぶ村の水害』 占冠村役場
- ・岸本翠月・竹林利彦編 1974 『芦別市史』 芦別市
- ・芦別市 1994 『新芦別市史 第一巻・第二巻』 同市
- ・芦別市 2015 『新芦別市史 第三巻』 同市

言語

- ・富良野町郷土史研究会 1965 『空知川上流におけるアイヌ語の地名』 同研究会
- ・国立国語研究所 1965 『共通語化の過程―北海道における親子三代のことば―』 同研究所
- ・国立国語研究所 1997 『北海道における共通語化と言語生活の実態(中間報告)』 同研究所

・田中吉人 1969 『川は生きている―空知川アイヌ語地名の旅―』 楡書房

・知里真志保 1973 『知里真志保著作集3 生活誌・民族学編』 平凡社

・知里真志保 1984 『地名アイヌ語辞典』 北海道出版企画センター

・永田方正 1984 『初版 北海道蝦夷語地名復刻版』 草風館

・山田秀三 1984 『北海道の地名』 北海道新聞社

・北海道環境生活部総務課アイヌ施策推進室編 2001 『アイヌ語地名リスト』 北海道環境生活部

・平凡社 2003 『日本歴史地名大系1 北海道の地名』 同社

事典

・富良野青年会議所編 1986 『富良野事典』 同会議所

・角川日本地名大辞典編纂委員会編 1987 『角川日本地名大辞典 北海道 上・下巻』 角川書店

・富良野市人物事典編集委員会 2004 『富良野市開庁100年記念 富良野市人物事典』 富良野市郷土研究会

行政

村・町・市要覧

・富良野町役場企画室 1956 『富良野町勢要覧』 富良野町

・富良野町役場企画室 1959 『富良野町勢要覧 1958』 富良野町

・富良野町役場 1961 『富良野』 富良野町

・富良野町役場 1962 『町勢のあらまし』 富良野町

・富良野町役場 1963 『富良野町勢要覧 '63』 富良野町

・富良野町役場 1966 『ふらの 1966』 富良野町

・富良野市 1968 『市勢要覧 ふらの』

・富良野市 1969 『昭和44年版 市勢要覧 進みゆく富良野』

・富良野市 1971 『市勢要覧 ふらの』

・富良野市 1972 『市勢要覧 ふらの』

・富良野市 1973 『開基70周年記念 市勢要覧 ふらの』

・富良野市 1974 『第30回国体冬季大会開催記念 市勢要覧 '74 富良野』

・富良野市 1975 『市勢要覧 '75 富良野』

・富良野市 1977 『市勢要覧 '77 富良野』

・富良野市 1980 『富良野市勢要覧 1980』

・富良野市 1983 『開基80年 '83 富良野市勢要覧』

・富良野市 1992 『富良野市勢要覧 1992』

・富良野市 1996 『富良野市勢要覧 1996』

・富良野市 1999 『富良野市勢要覧』

・北海道ふるさと新書編集委員会 2003 『富良野市 北の国から発信するヘソ文化(富良野市開庁100年記念市勢要覧)』 富良野市

・富良野市総務部企画振興課 1993 『ふらの市民ハンドブック』 富良野市

・山部村 1960 『山部村勢要覧 1960』

・山部町役場 1965 『町勢要覧 新しい町づくり』 山部町

総合計画

・富良野市 1967 『新市建設総合計画前期5カ年 昭和42年から昭和46年まで』